

平成 30 年 8 月 29 日現在

機関番号：33801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26350851

研究課題名(和文) 在日外国人少年に対する段階的非行予防教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a step-by-step delinquency prevention education program for juvenile foreign residents in Japan

研究代表者

木宮 敬信 (Kimiya, Takanobu)

常葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：20288400

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：在日外国人児童生徒は、言葉や文化の相違、家庭や外国人コミュニティの環境等、非行化しやすい要因を多く持っている。また、こうした問題が、多文化共生社会の実現の障害となっていることも事実である。本研究では、彼らに対する教育プログラムを開発、実践していくことを目的としている。研究成果として、日本人生徒との協働プログラムの実践やスポーツやフィールドワーク等の体験型学習の有効性が確認された。成果物として、学校へのプログラム教材の提供に加え、家庭内での知識学習や保護者への必要情報を提供するためのリーフレットやwebサイトを作成した。

研究成果の概要(英文)：Foreign schoolkids in Japan are surrounded by many factors that can easily led to delinquent behavior, such as differences in language and culture, the environment of families and foreign communities. It shall also be taken into consideration, that such problems pose obstacles to the implementation of multicultural symbiosis society. This research aims to develop and practice educational programs for the foreign kids. As the result of this research, the effectiveness of practical collaboration program with Japanese schoolkids and experiential learning such as sports and field work was confirmed.

As a result, we created leaflets and websites to provide knowledge learning at home and necessary information to parents as deliverables in addition to providing teaching materials to schools.

研究分野：安全教育学

キーワード：在日外国人生徒 多文化共生 非行予防教育

## 1. 研究開始当初の背景

在日外国人の定住化が進む中、外国人集住地区の自治体では多文化共生社会の実現を目指して様々な取り組みが行われてきた。しかし、この実現には多くの課題が残されている。とりわけ在日外国人による犯罪問題は、日本人コミュニティとの間に心理的な溝を作り、市民の体感治安の悪化の一因にもなっている。特に近年は、犯罪目的で来日するケースから、日本で生まれ育った外国人による犯罪が増加している。この原因は、経済的な問題に加えて、文化の相違や言葉の問題等をきっかけとして非行集団化することが挙げられている。つまり、日本人コミュニティとの壁が外国人少年の非行化を招き、この非行化が更に壁を高くするという悪循環が見て取れる。

このように切迫した環境下で、短期的な効果が期待される「犯罪から子どもを守る」取り組みの充実と比べて、中長期的な視点と言える非行予防教育の充実は多くの課題を残している。筆者の過去の調査結果からも、家庭環境を含め、彼の周囲に様々な危険因子が存在することが指摘されており、非行防止を目的とした教育や支援の充実は地域の大きな課題である。さらに、彼らに対する非行予防教育は、文化の違いやそもそもの知識が不足していることなどから、日本人を対象としたこれまでの非行予防教育と同じ方法では効果が薄いと考えられる。また、日本人コミュニティとの影が非行化を遠因となっていることを踏まえれば、多文化共生プログラムとの連携が必須と言える。以上のような、地域のニーズに応える教育プログラムの開発が本研究の主たる目的である。

## 2. 研究の目的

前述した社会的背景を踏まえて、外国人児童生徒に対する効果的な非行予防教育プログラムを開発することが本研究の最終的な目的である。

また、効果的なプログラム開発のために、以下のような課題について段階的に明らかにしていく。

### 諸外国における非行予防教育について

家庭環境や文化の違いをプログラムに反映させるために、諸外国で行われている非行予防教育の現状や、プログラム作成時に留意すべき事項等について調査を行う。また、教育内容と併せて、外国人児童生徒に対して効果的な教材仕様や教育方法についても検討していくことが必要であり、この点についても参考となる事例を探していくこととした。

### 知識学習と体験学習を段階的に配置したプログラムの効果について

過去の研究成果から、在日外国人児童生徒の防犯に関する知識不足が指摘されている。特に、日本独自の取組や犯罪状況等について、十分に理解されているとは言い難い状況が見て取れた。そこで、筆者は、知識学習を中心とした教材を作成してきた。しかしながら、知識学習だけでは、実際の行動変容につながらないケースがあることも指摘されている。そこで、知識学習から行動変容につなげる工夫として、知識学習と体験学習を段階的に実施するプログラムを検討し、その効果について検証することとした。体験学習の中でも、特にスポーツプログラムと野外活動については、非行予防に効果があるとされ、既にいくつかのプログラムが実施されている。そこで、これらの体験学習をベースとして実証実験を行うこととした。

### 日本人児童生徒との協働を軸としたプログラムの効果について

様々な取り組みを通じて、日本人や日本文化への理解を深めることは非行予防に大変重要である。特に、生活環境周辺に非行化しやすい危険因子が多く存在することも指摘されるため、日本人コミュニティとの接点を持ち、外国人コミュニティのみに依存する生活から脱却するこ

とも強く求められる。併せて、日本人児童生徒にとっても、外国人児童生徒を理解していくことは多文化共生社会を実現する上で非常に重要である。そこで、日本人と外国人との協働プログラムを実施し、互いの理解を深める意義や課題について検討することとした。

#### 在日外国人家庭における非行予防教育プログラムの実践について

外国人家庭では、共働きの家庭が多く子どもの教育に十分な時間を確保できないこと、保護者の日本語理解が不足しており必要な情報が入手できないこと等、子どもの非行予防について日本人家庭に比べて多くの課題を抱えている。非行や犯罪被害の入り口になりやすいインターネットの利用についても、日本人に比べて、知らない人とのメールのやり取り等もよく行われていることが明らかになっている。そこで、保護者に児童生徒の非行予防に役立つ知識や、家庭内で親子で学ぶ機会となるような教材を提供することとした。

### 3. 研究の方法

#### 諸外国における非行予防教育の調査について

先行研究の分析から、先進的な非行予防教育の実践対象として、犯罪研究との関連で米国、移民政策との関連でドイツ、アジア地域の代表として中国の3か国の現状を調査することとした。調査は、現地の行政や学校等の教育機関へのヒアリング調査、関連資料の収集を目的とし、平成26年度に実施することとした。

#### 知識学習教材の作成

諸外国での現地調査での内容を踏まえて、知識学習を目的とした e-learning 教材を作成する。e-learning 教材の作成にあたっては、筆者が過去に作成したクイズアプリ教材をベースとし、新たな知見を加えて作成する。作成した教材は、研究協力校である在日ブラジル人学校で

実証実験を行い評価する。

#### 体験型プログラムの検討

在日ブラジル人学校で、スポーツや野外活動といった体験型プログラムを実施し、その効果や課題について検討する。また、外国人が積極的にプログラムに取り組むための配慮について、学校や保護者の意見をまとめ、プログラム開発に役立てる。

#### 日本人児童生徒との協働プログラムの検討

日本人と外国人との協働プログラムを実施し、その効果や課題について検討する。外国人は、研究協力校である「ムント・デ・アレグリア学校」の生徒に参加を依頼している。日本人については、同市内の児童生徒を対象として、学校を通じて参加希望者を募ることとした。プログラム内容は協働で行う知識学習、スポーツプログラム、野外活動としている。プログラム実施後、それぞれに対して事後評価を行う。

#### 保護者向け非行予防教育プログラムの検討

外国人児童生徒の保護者に対して、非行予防や防犯に必要な知識を提供すること、家庭内教育に役立つプログラムを提供することを目的としたツールを開発し、外国人学校を通じて保護者に無償提供する。リーフレット形式での提供に加えて、専用の web サイトを開設し、情報提供やクイズ教材の利用を可能にする。

### 4. 研究成果

#### 諸外国における非行予防教育の調査について

米国、ドイツ、中国の3か国で非行予防教育の現地調査を行った。米国での調査は、ニューヨーク、ボストンの現地警察、教育委員会、学校で行った。教育プログラムについてのヒアリングを行ったほか、特にボストンで行われていた非行少年に対する更生プログラムについて参考となる資料を収集した。ドイツでの調査は、地方都市でありながら若者が多く犯罪発生率が高

いマールブルグの警察、学校、大学で行った。非行予防キャンプが効果を上げていること、非行や犯罪の数に応じて教育プログラムへの参加を義務付けたり、監視や罰則を強化したりしていること等、参考となる取組がいくつか見られた。中国での調査は、大連市役所の協力の下、学校や教育委員会へヒアリングした。市内一斉に行われている「安全の日」の取組は、児童生徒だけでなく家庭の意識を高める上で効果的であり、参考になる取組であった。これら3か国での現地調査の中で判明した、外国人児童生徒に不足している教育内容や非行化の流れ等について、知識学習教材や家庭教育教材の内容に反映させていくことができた。また、体験学習を軸とした効果的な非行予防教育プログラムの検討についても、現地での様々な実践内容を参考として検討していくことができた。

#### 知識学習教材および体験学習プログラムの作成

諸外国での現地調査の結果を参考に、在日外国人に必要な教育内容の検討を行った。併せて、過去に筆者が行った外国人と日本人との安全意識の相違についての調査結果も踏まえ、教材内容を選定した。その結果、日本人は理解しているものの外国人の理解が低い安全に関する基礎知識や外国人の非行の入り口になりやすい薬物乱用教育、また規範意識や道徳観を問う内容とした。教材は外国人児童生徒に親和性のある携帯端末を使ったe-learning形式とした。当初はスマートフォンアプリでの個人利用を想定していたが、授業内で利用しやすい形態が求められたため、PCやタブレット端末を使ったグループ学習形式で使用できる教材とした。クイズ形式による知識学習教材に加えて、自分の考えをもとにグループディスカッションを行う思考学習教材を作成した。教材は全て外国人が理解しやすいようにポルトガル語で作成した。規範意識や道徳観を問うグループディスカッション教材

については、わかりやすいように簡単なアニメーションで作成した。作成した教材については、平成27年3月に在日外国人学校「ムント・デ・アレグリア学校」の12歳～16歳のブラジル人生徒を対象に実証実験を行った。学習時間は約90分と長時間となったが、積極的に学習することができた。学習内容については、生徒間で知識の差が大きかったものの、各グループに配置したボランティアを中心に、知識の不足する生徒をサポートする様子が伺え、概ね目標とした成果を上げることができた。個人やグループ間の格差が大きかったことから、知識学習については学校での集合学習形式ではなく、家庭を中心とした個人学習形式の方が望ましいのではないかとの結論に至った。集合学習では、家庭での知識学習を踏まえたディスカッションやフィールドワーク形式が効果的であろうと結論づけた。体験学習教材の検討にあたっては、事前に生徒の嗜好や学校の希望を反映させながらスポーツ活動をベースとしたプログラムを立案した。スポーツを通じて他者と協力することや、試合での達成感等を感じさせるために、チームで行うボールゲームを題材とした。その中でも、これまでの経験に左右されにくいことや、一人一人の活躍の場が設定できること、協力場面が具体的に設定されていること、ルールが分かりやすいこと等を踏まえて、レクリエーションスポーツである「キンボール」を実施した。プログラム実施後に参加者へのアンケート調査の実施およびボランティアからチームの様子についてヒアリング調査を実施した。その結果、いくつかの配慮点が指摘された。特に、試合の結果に非常にこだわる生徒が多く、チームスポーツの目的的理解が不十分で「試合に勝つことが楽しい」という受け止め方をしてしまう生徒が多く見られたことは、今後のプログラム立案の際に検討していく課題となった。

日本人児童生徒との協働プログラムの検討

平成 28 年 11 月に日本人との協働プログラムを立案した。内容は、グループでのフィールドワークを通じて、安全に関する必要知識を学ぶ安全マップ学習プログラム、異文化理解を深めることを目的とした野外調理体験、グループでの協働活動を深めるためのレクリエーションスポーツ体験の 3 つである。「ムント・デ・アレグリア学校」の通うブラジル人 16 人、市内の公立中学校および一部の私立中学校から推薦されて参加した日本人 19 名の合計 35 名が参加した。なお、各グループに大学生リーダーと通訳ボランティアを配置している。

#### ア．安全マップ学習

フィールドワークに出る前に、グループごとに安全に関する知識学習を行った。この学習は、事前に作成した学習ファイルを用いて、大学生ボランティアがタブレット端末を利用して実施した。フィールドワークでは、各グループにタブレット端末を配布し、GPS を利用した地図アプリに写真やコメントを貼り付けていく形式で作成した。作成したマップは、web 上で各グループが共有し、他のグループのマップを空き時間に閲覧できるようにした。事後アンケートやヒアリングの結果から、日本人と外国人生徒間で積極的にコミュニケーションを取る様子は見られず、大学生が間を取り持つ必要があったことが伺えた。また、全体的に外国人生徒に安全学習をさせるという目的は達成できたと考えられるが、日本人生徒にとっては簡単な内容であり、互いに知恵を出し合って協力するとか、話し合うといった場面が見られず、課題設定について再検討が必要との結論に達した。

#### イ．異文化調理体験

調理ボランティアの指導のもと、各グループが日本料理とブラジル料理の調理に取り組んだ。併せて、事前に調理した互いの国を代表する料理を説明しながら食する機会を作った。調理については、段取りよく進められない様子が見ら

れたが、それが却ってグループ内のコミュニケーションを促進したとの感想を多く聞くことができた。日本人と外国人には共通の話題が乏しく、積極的にコミュニケーションを取るためには何かきっかけが必要である。この点において、共同作業は、きっかけ作りに有効であったと考えられる。また、一緒に食する時間が更にコミュニケーションを深めたようで、フィールドワークでは互いに距離のあったグループも、徐々によい関係を築けている様子が伺えた。

#### ウ．レクリエーションスポーツ体験

体験学習プログラムで実施した「キンボール」を実施した。グループの人数を配慮して、同時にプレイする選手を 5 人とした。また、ピブス色のコールについては、日本語、ポルトガル語、英語を試合ごとに指定して行った。外国人生徒は依然経験した生徒も多く、積極的にグループをリードしていた。試合中は、互いに声をかけ励ましたり、褒めたりする様子が多く見られた。全体プログラム終了後の事後評価やスタッフからのヒアリング調査の結果、いくつかの傾向が明らかとなった。言葉の問題もあり、互いにコミュニケーションが取りにくかったことは事実であるが、苦勞してコミュニケーションが取れたことに楽しみを感じる生徒が多くいたことも事実であった。また、他国の生徒との活動にまた参加したいと回答していた生徒が多くいることも明らかとなった。こうしたイベントが身近で頻繁に開催され、外国人生徒が同世代の日本人との接点を多く持つことが有効であると再認識することができた。

#### 保護者向け非行予防教育プログラムの検討

外国人学校へのヒアリングや外国人児童生徒の生活状況から、保護者の理解が不足していること、家庭教育が十分に行われていないことが指摘された。そこで、保護者向けの教材を作成し、外国人学校を通じて無償配布することとした。教材内容は、安全に関する基礎知識として、

日本での未成年犯罪被害の状況、犯罪から子どもを守るための取組、インターネットの危険性、薬物乱用教育、在日外国人少年による犯罪事例、犯罪加害者にならないために必要なこと、各種問い合わせ窓口から構成されている。教材体裁は A4 サイズ 8 ページリーフレットでポルトガル語と日本語を併記している。併せて、このリーフレットと同内容を記載した web サイトを開設した。web サイト上には、これらの必要情報のほか、親子で取り組むクイズ型教材も利用できるようにした。また、参加可能な体験学習プログラムやスポーツイベントの情報、異文化交流の機会情報などについても随時掲載することとしている。また、本研究成果を反映させたフィールドワークを中心とした知識学習教材についても、課題修正の後に web サイト上での内容公開および必要データのダウンロードが可能になるよう準備を進めている。

## 5 . 主な発表論文等

( 研究代表者、研究分担者には下線 )

[ 雑誌論文 ] ( 計 3 件 )

- ( 1 ) 木宮敬信、中学生の防犯意識や危険行動に関する現状 ~ 在日ブラジル人中学生と日本人中学生の比較を踏まえて ~、常葉大学教育学部紀要、査読無、37 巻、2017、237-246
- ( 2 ) 木宮敬信、在日ブラジル人中学生を対象とした安全教育プログラムの実践、学校危機とメンタルケア、査読無、9 巻、2017 年、12-21

[ 学会発表 ] ( 計 1 件 )

木宮敬信、在日ブラジル人中学生を対象とした安全教育プログラムの実践、日本健康教育学会、2017 年

[ 図書 ] ( 計 0 件 )

[ 産業財産権 ] ( 計 0 件 )

[ その他 ]

ホームページ

在日外国人の保護者向け子どもの安全サイト、<http://zeonewr.jp/safety/>

小冊子

在日外国人の保護者向け子どもの安全ブック、2017.3

## 6 . 研究組織

( 1 ) 研究代表者

木宮 敬信 ( KIMIYA TAKANOBU )

常葉大学・教育学部・准教授

研究者番号 : 20288400

( 2 ) 研究分担者

戸田 芳雄 ( TODA YOSHIO )

東京女子体育大学・体育学部・教授

研究者番号 : 00578859